

令和2年度修了

修士学位論文

現代日本語における数量表現のしくみ

弘前大学大学院 人文社会科学研究科
文化科学専攻 総合文化社会研究コース

学籍番号：18GH104

張 瑩

(指導教員：山本 秀樹教授)

目次

1. 序論.....	1
2. 数量詞の定義.....	2
3. 数量表現の構成.....	4
3.1. 数量表現に関する先行研究とその問題点.....	6
3.2. 動詞句の数量表現.....	12
3.3. 属格句の数量表現.....	17
4. 数量表現と偽数量表現の構成的な違い.....	23
4.1. 動詞句の数量表現構文と動詞句の数量表現構文包含文.....	26
4.2. 属格句の数量表現構文と動詞句の数量表現構文.....	32
4.3. Q の働き	34
5. 結論.....	36
6. 参考文献.....	38

1. 序論

数量表現においては、「りんごを3個食べた」、「りんご3個を食べた」、「3個のりんごを食べた」のような、統語構造が違うが、同じ知的意味を表す三つの形が同時に成立するという現象が見られる。この現象は「数量詞の遊離 (quantifier floating)」と呼ばれている。ところが、「山道を20km歩く」や「今年は東京へ3回行った」や「10段の階段を登った」のような、上記のような三つのタイプに変換できない用例もある。「山道を20km歩く」を「山道20kmを歩く」「20kmの山道を歩く」にすると、意味が変わる（「山道の全長が20kmである」という意味に変わってしまう）。「今年は東京へ3回行った」を「*今年は東京3回へ行った」「*今年は3回の東京へ行った」にすると、非文になる。「10段の階段を登った」を「階段を10段登る」「階段10段を登る」にすると、意味が変化する（階段の全体の数が不明になる）。また、動詞句だけでなく、属格からの数量詞遊離もみられると指摘されている（Kikuchi 1994）。例えば、「日立が学生の採用を300人中止した」。だが、それと同じ構文であるにもかかわらず、異なる性質を示す用例もある。例えば、「*ジョンが子供たちのおもちゃを3人壊した」が非文である。

なぜ「りんごを3個食べた」、「りんご3個を食べた」、「3個のりんごを食べた」のような三つの形が同時に成立できるものとできないものがあり、また「日立が学生の採用を300人中止した」が文法的で、「*ジョンが子供たちのおもちゃを3人壊した」が非文法的であるのだろうか。この問題について活発な議論がなされている。数量表現に見られる差異を、統語的な観点により、数量表現を構成する名詞句と数量詞が相互C-統御し合うかどうかにより帰着する研究もあれば、数量詞の表す対象や数量詞の性質に帰着する研究もある。しかし、相互C-統御説と数量詞の表す対象説には反例がみられる。数量詞の性質説には演繹的な解釈が欠けているという問題がある。また、属格句の数量表現に見られる差異も、相互C-統御説で解釈されているが、そう解釈されては、動詞句の数量表現の場合に対する解釈との整合性が低くなる。

本稿は、動詞句の数量表現と属格句の数量表現にみられる数量詞遊離の可と不可などのような文法性の違いや意味の違いを統一的に説明できる解釈を明らかにすることを目指し、数量表現の構成、及び数量詞の働きは一体どのようなになっているのかの検討を試みたい。

本稿の構成は以下の通りである。第2章では、数量詞に対して、厳密に定義する。第3章で、数量表現に関する先行研究を詳しく紹介し、その問題点を指摘する。その上で、筆

者が想定した数量表現の構成を説明していく。第4章では、数量表現が用いられた構文の類型を明らかにし、上述した数量表現に見られる数量詞遊離の可と不可という差異の原因と、数量詞の働きを解明する。第5章でまとめを述べる。

2. 数量詞の定義

本題となる数量表現の話をはじめる前に、全体の数量詞の特徴を概観しておこう。まず、何を数量詞と見なすのかを先に定義しておきたい。通常、「3冊」「5メートル」のような[数詞＋類別詞]のものを数量詞とみなす¹が、下記の(1)で示したように、「全部」も「3冊」と同じく「本」の量を表している。つまり、「全部」「たくさん」「少し」などの類別詞を持たないものは「3冊」などと同じような機能を持っているため、数量詞と扱うべきだと考えられる。加藤(2003)が指摘したように、この両者の違いは特定の数量を表すのか不特定の数量を表すのかに過ぎない。加藤は前者を特定数量詞と、後者を不特定数量詞と呼ぶ。

- (1) a. 先週買ってきた本を 3冊 読んだ。 ⇒ 特定数量詞
 b. 先週買ってきた本を 全部 読んだ。 ⇒ 不特定数量詞

ここで数量詞を定義しておく。筆者は、「数えられるもの」や「量化できるもの」の数または量を限定するものを数量詞だと見なす。

ところが、加藤(2003:431)は次のような例を挙げ、「かなり」も「250 km」も「語彙の機能」という観点から見れば同じように距離を表している」という理由で、「かなり」をも数量詞として扱う。

- (2) a. 祐子は北陸自動車道を 250 km 走り、休憩をとった。
 b. 祐子は北陸自動車道を かなり 走り、休憩をとった。

しかし、「語彙の機能」が何を指すのかが曖昧である。確かに、統語的には「かなり」は「250 km」と似ているが、統語的理由だけで「かなり」を数量詞と認定するのは不十分であろう。本稿では、数量詞を下記の(3)のように考える。

¹ 「数詞＋つ」もこの類別に入れる。

(3) 数量詞というのは、「数えられるもの」や「量化できるもの」の数または量を限定するものである。

「かなり」は数か量を限定する機能がなく、程度を表すという用法しか持たない。例えば、下記の(4a)と(4b)を比較してみれば、数・量を限定する用法と程度を表す用法の違いが分かる。(4a)の「少し」は「走る」という動作の完成度(=「北陸自動車道」の全長をどれぐらい走ったのか)を表しているにとらえることも勿論できるが、「量化されるもの」の実体、すなわち「北陸自動車道」の一部そのものを指しているにとらえることも可能である。それに対して、(4b)の「かなり」は「北陸自動車道を走る」という動作の完成度を表しているとはとらえられるが、「量化されるもの」の実体を指しているとは考えられない。言い換えれば、「かなり」は「北陸自動車道」に働きをかけているのではなく、「北陸自動車道を走る」という出来事全体にかけているということである。

- (4) a. 祐子は北陸自動車道を少し走った。
b. 祐子は北陸自動車道をかなり走った。

したがって、本稿では、名詞句(の指示物)の数・量を限定するものを数量詞と認め、出来事全体に働きをかけるものは**通常の副詞**と見なす。ちなみに、注意すべきは、「少し」などは通常の副詞としかとらえられない場合もあることである。例えば、

- (5) 少しのことでイライラする。

「全員」「数本」など「全+類別詞」や「数+類別詞」の数量詞に関しては、筆者は加藤(2003)と同じ考えを持ち、それらを特定数量詞の変種と考えてよいと思われる。

ところが、一見数量詞の形をとったものでも、必ずしも数量詞であるとは限らない。本節の最初で述べたように、数量詞とは「数えられるもの」や「量化できるもの」の数か量を限定する働きをするもののことである。よって、「ホーキング博士が 2018 年 3 月 14 日 に死去した」の「2018 年 3 月 14 日」や「ジョギングで時速 10 キロ で走る」の「(時速) 10 キロ」は数量詞の定義に当てはまらず、普通の名詞に近い(奥津 1969:64)、数量詞と

扱わない²。

なお、数量詞は、「3冊の本を読む」のように名詞的な性質を示す場合もあれば、「本を3冊読む」のように副詞的な性質を示す場合もある。このように、数量詞の品詞性に関してはよく議論されている。本稿では数量詞の品詞を決めようとはせず、時には名詞的になったり、時には副詞的になったりすると考える。

3. 数量表現の構成

通常、数量詞と名詞の結合体が数量表現³とされる。第1章でも触れたように、数量表現に関する議論においては、以下のようにその数量詞の文中で出現する位置によって、三つのタイプに分けられる⁴。本稿では、奥津の一連の論考に倣って、名詞句 (Noun) を N、格助詞 (Case) を C、数量詞 (Quantifier) を Q で表し、(6a) のような[名詞+格助詞+数量詞]のものを NCQ タイプと、(6b) のような[名詞+数量詞+格助詞]のものを NQC タイプと、(6c) のような[数量詞+の+名詞+格助詞]のものを Q ノ NC タイプと呼ぶことにする⁵。

- | | |
|--|------------|
| (6) a. <u>りんご</u> <u>を</u> <u>3個</u> 食べた。 | NCQ タイプ |
| b. <u>りんご</u> <u>3個</u> <u>を</u> 食べた。 | NQC タイプ |
| c. <u>3個</u> <u>の</u> <u>りんご</u> <u>を</u> 食べた。 | Q ノ NC タイプ |

数量表現には上記(6)のように、Q ノ NC タイプ、NCQ タイプ、NQC タイプのように統語構造が違うが、同じ知的意味を表す現象が見られると指摘されている。ところが、下記の(7)のように、NCQ タイプと NQC タイプと Q ノ NC タイプという三つのタイプが同時に成立できない場合もある。

² 加藤 (2003:436) も「数量詞」は「数や量に関する表現」ではなく、「数量」を表示するものと捉えるものであり、「量的なものを表しているのではない」から、「時称詞」と速度を表す語は数量詞と見なさないと述べたが、奥津 (1969) はそれらを数量表現に入れている。

³ 奥津 (1969) は「数量的表現」、矢澤 (1988) は「数量の表現」という呼称を用いられている。

⁴ [名詞+の+数量詞+格助詞] (例えば「太郎がくれたりんご の 3個 を 食べた」) のような N ノ QC タイプに言及した研究もあるが、本研究の研究対象ではないため、詳しく説明しない。なお、このタイプの用例が不自然に感じる日本語母語話者もいる。また、岩田 (2013) は以上のほかに、「りんごは 3個だ」のような「述部型」と、「りんごを 3個で 売っている」のような「デ格型」と二つのタイプも挙げているが、本稿の研究対象と関係しないため、略する。

⁵ 奥津 (1969・1983・2007) では Q ノ NC 型、NCQ 型、NQC 型、N ノ QC 型と表記されている (N ノ QC 型に言及されているのは奥津 (2007) のみ)。

- (7) a. 今年は 東京 △ 3回 行った。
 b. *今年は 東京 3回 △ 行った。
 c. *今年は 3回 △ 東京 △ 行った。

同じように変形できないことは、(6)と(7)の構造が違うということであろう。筆者は、(6)のような同じ知的意味を表す NCQ タイプ、NQC タイプ、Q ノ NC タイプの三つのタイプが同時に成立するもののみを数量表現と見なす。したがって、三つのタイプが同時に成立する条件が分かると、数量表現が成立する条件が分かることになる。これから、三つのタイプが同時に成立する条件を明らかにすることを通じ、数量表現の構成を解明する。

なお、慣例では、(6)のような三つのタイプにおける N のことを「Q によって修飾された名詞句」と定義され、先行名詞句⁶（以下、「先行 N」と簡略する）と呼ばれている。また、赤楚（2005）のようにそれを「ホスト名詞句（Host noun phrase）」と呼ぶことも多い。しかし、実際のところ、NCQ タイプ、NQC タイプ、Q ノ NC タイプの三つのタイプが同時に成立するかどうか、つまり、数量表現であるかどうかと関係なく、(7)のような文の N（＝「東京」）を先行 N と呼ぶ場合も少なくない。しかも、「Q によって修飾された名詞句」という定義自体も曖昧である。本稿では、「先行 N」と「ホスト N」を区別し、(6)のような Q と述語動詞と数量表現を構成する N のみを「ホスト N」と呼ぶ。それに対して、Q と述語動詞と数量表現を構成する N であるかどうかにかかわらず、形の上で数量表現のように見える N と Q と述語動詞の結合体でさえあれば、その結合体における N を「先行 N」と呼ぶことにする。「先行 N」の定義をさらに厳密にすれば、「文における述語動詞の主観性・意志性の低い項名詞句」となる（詳しい説明は第 3 章に後述する）。例えば、(6)における N＝「りんご」も(7)における N＝「東京」も先行 N であるが、他動詞の主語を主観性・意志性の高い項名詞句と見なすため、それらの主語名詞句は先行 N とならず、ただの N である。ところが、(6)における N＝「りんご」は Q＝「3 個」と述語動詞＝「食べた」と数量表現を構成しているため、ホスト N であるが、(7)における N＝「東京」は Q＝「3 回」と述語動詞＝「行った」と数量表現を構成していないため、ホスト N ではない。要するに、筆者が想定した「先行 N」は必ずしも Q と述語動詞と数量表現を構成するとは限らない N である。

⁶ 慣例に従い、(6c)の「りんご」ような、Q に先行しないものも先行名詞句と呼ぶ。

3.1. 数量表現に関する先行研究とその問題点

数量表現における NCQ タイプ、NQC タイプ、Q ノ NC タイプの三つのタイプが派生関係にあるか否かに関しては活発な議論がなされている。岩田（2013）がまとめたものに従えば、初期の議論で、Q ノ NC タイプや NQC タイプが基底形で、そこから Q が移動して NCQ タイプに変形したと考えられたため、この現象を「数量詞の遊離 (quantifier floating)」と称し、NCQ タイプ構文を「遊離数量詞構文」と名づけ、そこにある Q を「遊離数量詞」と呼ぶことになった。他方、派生関係を認めない研究もあり、その場合「遊離数量詞構文」に代わって、「数量詞連結構文」という呼称が使われている。本稿ではこの三つのタイプの間に派生関係があるかという問題に触れないが、論述の便宜上、Q 移動を想定しない立場で「遊離数量詞」、「遊離数量詞構文」という用語を用いる（すなわち、「遊離数量詞」=NCQ タイプ構文における Q、「遊離数量詞構文」=NCQ タイプ構文）。

遊離数量詞構文の成立に関しては、多くの研究では次の二つの制限が指摘されている。

- (8) a. 格に制限があり、N がガ格かヲ格の場合にだけ遊離数量詞構文が成立する。ただしそれは表層格の問題なのか文法関係の問題なのかはまだ定説がない。
- b. 述語の種類に制限がある。Harada (1976) によれば、状態性述語の文⁷の場合、遊離数量詞構文が成り立たない。

その中、ホスト N と遊離数量詞の関係について論じた研究には Miyagawa がある。Miyagawa (1989) は統語的な観点で、ホスト N と遊離数量詞の関係は叙述関係 (predication) であり、そして遊離数量詞構文が成立するには、ホスト N と遊離数量詞が相互 C-統御⁸し合わなければならないと述べた。さらに、Miyagawa (1989) は自動詞文に関して、次のように述べた—(9) と (10) のように、非対格動詞⁹の場合は、動詞句内の N が元々目的語に位置するが、表層構造で主語に移動しただけで、ガ句（「生徒が」）の痕跡と遊離数量詞（「3 人」）との相互 C-統御が成り立つ。それに対して、非能格動詞¹⁰なら動詞句内の N が元々主語の位置にあるため、ガ句（「子供が」）と遊離数量詞（「2 人」）との相互 C-統御が成り立たな

⁷ 基本的に名詞述語文と形容詞述語文を指す。ただし例外もある。例えば、「欲しい」は状態性述語ではなく、他動詞に近いものである。

⁸ 要素 A がすぐ上の節点に支配され、かつその上の節点は別の要素 B（または B の下の節点にある要素）をも支配している時、A が B を C-統御しているという。相互 C-統御とは二つの要素が互いに C-統御し、姉妹関係にあるということである。

⁹ 「あく」「落ちる」などのような対象を表層主語にとる自動詞。

¹⁰ 「笑う」「踊る」などのような動作主を主語にとる自動詞。

い—。

(9) 生徒がこの階段で3人転んだ。

(10) *子供がゲラゲラと2人笑った。

しかし、下記の反例から見れば、これは相互 C-統語とは関係なく、Q と N の結合体は意味的に「N がカウント、計算され、結果 N がどれくらい存在するのかを表す」という数または量の情報提供に重点を置いているかどうかにかかわる。

(11) 子供がゲラゲラと2、3人笑った。

(12) 太郎はお祭りの写真を友達に見せて、指をさして説明をしているところだ——

「女の子がここで 100人、男の子がそこで 300人踊ったよ」と言った。

赤楚（2005）が指摘したように、(10)のような非能格動詞文でも、(11)のように遊離数量詞を概数数量詞¹¹や存在数量詞¹²にすれば、文が文法的である。その原因に関して赤楚（2005:68）は、概数数量詞の遊離数量詞は数量に関する指定が乏しいことに関係があると主張した。しかし、筆者はそれに反して、次のように考える—これは、概数数量詞や存在数量詞が用いられると、「その N がカウント、計算されているのだ」と認識されやすくなる。そのため、もともと数・量の情報提供に参与しているととらえにくい遊離数量詞を概数数量詞や存在数量詞に換えることにより、N をホスト N にとらえることが可能になり、遊離数量詞と数量表現をなしたからである—。

また筆者の作例の(12)も構文上(10)と同じだが、文法的である。これも同じく、Q と N は数量表現として成り立てば、述語動詞の種類や相互 C-統御に影響されない。これは恐らく数・量の情報を提供する数量表現は客観的叙述であるため、主観性、意志性の高い N（例えば、他動詞の動作主と非能格動詞の動作主）がホスト N になりやすく、意志性の低い N（すなわち、先行 N のことである。例えば、自動詞の動作主と非対格動詞の動作主）のほうがホスト N になりやすいからであろう（(8a)に述べた、N がガ格かヲ格の場合にだけ遊

¹¹ 概数数量詞は「2、3 軒」「数人」のような数量が曖昧な数量詞を指す。

¹² 通例、存在数量詞は具体的な数量を表す基数数量詞及び概数数量詞を指すが、赤楚はそれと異なる定義で、基数数量詞と概数数量詞以外の不特定数量を表す数量詞を存在数量詞と呼ぶ。例えば、「いくつか」「何人か」「何冊か」など。

離数量詞構文が成立するというのもこれが原因であろう)。

だが、上記の(11)(12)のように、一般的に主観性、意志性の高いものだとして認識したものが用いられても、Q と先行 N と述語動詞が意味的に「述語動詞の対象である N がカウント、計算され、結果 N がどれくらい存在するかを Q で表す」という客観的叙述を構成してさえいれば、Q と N が数量表現として成り立つことは可能である。例えば、(12)は一見「踊る」という非能格動詞が用いられたように見えるが、その「踊った」は実際意味的に「踊っていた」に近く、つまり状態動詞であるため、やはり(12)における遊離数量詞=「100 人」と N=「女の子」と述語動詞=「踊った」、及び遊離数量詞=「300 人」と N=「男の子」と述語動詞=「踊った」は、客観的な叙述を構成している。そうすると、(12)とは違って(10)が非文になる原因は「遊離数量詞構文の述語動詞が非能格動詞の場合、付加的な語が遊離数量詞の前に挿入されると、遊離数量詞と N と述語動詞の結合体が主観的叙述になりやすく、数量表現と捉えにくくなる」と考えてもよいだろう。

ホスト N と遊離数量詞の関係を意味的な面から分析した研究もある。奥津 (1969) は、ホスト N と遊離数量詞とは意味的に密接な関係を持っていると述べた。例えば、「本を 3 冊読んだ」の「3 冊」は通常の副詞と同じように、動詞と直接の関係を持ちながら、その動詞の目的語「本」とも直接の関係をなしている。統語上からみれば、「本を読んだ」「3 冊を読んだ」¹³のように、「本」と「3 冊」は同じ文脈の中で単独でも目的語になりうる。意味上からみても、両者は同一物を指し示しているため、数量表現は同格名詞の一種である¹⁴と主張された。このように、奥津はホスト N と遊離数量詞が同格関係にあることを証明したが、この観点を数量表現の構成まで浸透させておらず、ホスト N と遊離数量詞が同格関係にある原因に関しても論じていない。

遊離数量詞と述語動詞との関わりについて論じたのは木村である。木村 (2005) は「*猿が 15 kg 石を投げた」(2005:49) が非文法的であるのは「15 kg」が副詞として「投げる」を修飾できないからであるのに対して、「花子が枝を 30 cm 折った」(2005:49) が文法的であるのは、「30 cm」が副詞として「折る」を修飾しているからであると述べ、「数量詞遊離の適格性が、副詞としての遊離数量詞と述語との意味関係で決定される」と論じた。だが、木村はなぜ数量表現における遊離数量詞と述語動詞がこのような意味関係にあるのかについては説明していない。

¹³ 「3 冊を読んだ」のような「Q ヲ V」構文に違和感を覚える日本語母語話者もいる。

¹⁴ 奥津 (1969) は NQ (例えば「本 3 冊」) が同格名詞構造をなし、そして Q がそこから分離され、NCQ タイプや Q ノ NC タイプに変形したと述べた。

なお、Q が表す対象によって、数量表現であるものと数量表現ではないものに分ける研究もある。加藤（2003）は下記の例を挙げ、継続時間(13)や動作の回数(14)、費用や時間の消費を表す「かかる」という動詞が用いられた場合(15)¹⁵、変化量を表す(16)場合には、遊離数量詞構文に対応する Q ノ NC タイプが存在しないと主張した。

- (13) a. 剛は本を 2 時間 読んだ。
b. *剛は 2 時間 の本を読んだ。 (加藤 2003:436)
- (14) a. 彼女は南アフリカを 2 度 訪れている。
b. *彼女は 2 度 の南アフリカを訪れている。 (加藤 2003:436)
- (15) a. 駅まで 20 分 かかる。 (加藤 2003:438)
b. 金沢まで 930 円 かかる。 (加藤 2003:438)
- (16) a. 十秒三 の世界記録を更新した。
b. 世界記録十秒三を更新した。
c. *世界記録を十秒三更新した。 (加藤 2003:437)

加藤（2003）は程度差を表す場合にも遊離数量詞構文に対応する Q ノ NC タイプが存在しないと述べたが、加藤は「良樹は三郎より 5 cm 背が高い」（加藤 2003:438）のような「比較を含む構文で、述部は形容詞か名詞による形容表現」を程度差とする。しかし、形容詞文と名詞文は本稿の研究対象でもなく、しかも述部が動詞句のものも存在するため、程度差の用例は筆者の作例の(17)を挙げる。

- (17) a. 温度を 1 度 あげる。
b. 平均速度が 5km/h アップした。 (筆者の作例)

しかるに、加藤（2003）の説には反例がみられる。(13) (14) (15) (17) のような継続時間や動作の回数、費用や時間の消費を表す「かかる」という動詞が用いられた場合、程度差を表す場合でも、遊離数量詞構文に対応する Q ノ NC タイプの用例が存在する。例えば、(13)「時間を 2 時間かけた」⇒「2 時間の時間をかけた」、(14)「(～) の回数を 2 回減ら

¹⁵ 加藤は費用や時間の消費を表す「かかる」という動詞が用いられた場合の例に関して、非文の例を挙げていないが、(15a)と(15b)の非文はそれぞれ「20 分の駅がかかる」と「930 円の金沢がかかる」であると考えられる。

す」⇒「2 回の（～の）回数を減らす」¹⁶、(15a)「時間が 20 分かかる」⇒「20 分の時間がかかる」、(15b)「お金が 930 円かかる」⇒「930 円のお金がかかる」、(17a)「(温度の) 差を 1 度あげる」⇒「1 度の（温度の）差をあげる」、(17b)「(平均速度の) 差を 5km/h アップした」⇒「5km/h の（平均速度の）差をアップした」。そして、(16)における「十秒三」はそもそも数量詞ではなく、「2018 年 3 月 14 日」と同じような名詞的なものである。言い換えれば、それが変化量ではなく、変化の達成量である。

また、岩田（2013:2-3）は先行 N と Q の関係から、度数を表す Q が用いられたものを数量表現から排除した。岩田は「N についてその数とカテゴリー情報を Q が表すもの」を数量表現と見なし、この「N についてその数とカテゴリー情報を Q が表す」ことを数量詞と名詞が相互に参照（refer）しているとする。例えば、「「学生が二人…」という場合は、学生の数で「二」が表し、学生は「人」というカテゴリーに含まれる」（岩田 2013:3）。これを「学生」と「二」が相互に参照しているという。さらに、岩田は数量詞と名詞が互いに参照していないという理由で、(7a)「今年は東京へ 3 回行った」のような度数を表す数量詞を用いたものを数量表現と見なさない。だが、これも先ほど加藤（2003）の説に反論したように、確かに(7a)における Q=「3 回」と先行 N=「東京」は互いに参照していないが、それだけで度数を表す数量詞を用いた表現を数量表現から排除するのは不適切である。例えば、下記の(18)の「1 回」が度数を表す数量詞でありながら、「N についてその数とカテゴリー情報を Q が表すもの」という定義には当てはまるというのがその反例である。

(18) この会社は今まで採用面接を 3 回行っていたが、今年から面接の回数を 1 回減らすことになった。

したがって、Q の表す対象によって数量表現であるかどうかを見分けるのは不適切だと考えられる。

また、Q ノ NC タイプが対応する遊離数量詞構文がない場合があるという現象に関して、国宏（1980:16）は以下の例を挙げた。(19a)と(19b)には意味の差がないが、(20a)と(20b)には意味の差があると指摘した。

¹⁶ 実際にはこのような言い方はしないが、ここでは、論理的に「2 回の（～の）回数を減らす」という意味を表す。

- (19) a. 3冊の本を読んだ。
 b. 本を3冊読んだ。
- (20) a. 10段の階段を登った。
 b. 階段を10段登った。

(20a)では階段の全体の数が10段であり、何段登ったのかはわからない。それに対して、(20b)では階段の全体の数不明だが、その中の一部、つまり、10段を登ったことはわかる。奥津(1983)はこの現象はQによる違いだと解釈し、(20a)のQを「属性Q」と、(20b)のQを「数量Q」と呼ぶ。そのほか、奥津と同じく原因をQに帰着させた研究には、神尾(1977)と加藤(2003)がある。神尾(1977)では、「3台の2000ccの車」を例に挙げ(下記の図1)、(20a)のようなQ(=属性Q)と(20b)のようなQ(=数量Q)との構造が違々と述べ、後者を限定詞、前者を「2000ccの車を買う」における「2000cc」と同じものと見なし、一般の修飾語とする。加藤(2003)では前者のQを「存在数量詞」と呼び、後者の場合のQを「非存在数量詞」と呼ぶ。

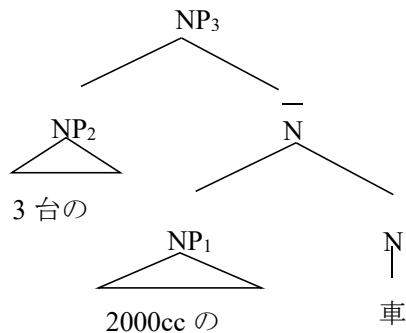


図 1

しかし、なぜQにはこの二つの異なる用法があるのかについては、演繹的な解釈が欠けている。筆者は、Qには「限定詞」と「修飾語」の二つの用法があることを認めるが、この二つの用法はQ自体の性質の違いではなく、Qが文における他の要素に対して持つ関係によって生じた異なる性質だと考えられる。

本節では、数量詞遊離の現象に関する先行研究とその問題点を概観してきた。先行研究の中では、統語的な観点により、先行NとQが相互C-統御し合うかどうかには帰着する研究(Miyagawa 1989)もあれば、Qの表す対象(岩田2013、加藤2003)や数量詞の性質(奥

津 1983、神尾 1977、加藤 2003) に帰着する研究もある。しかし、Q の表す対象説と相互 C-統御説には反例がみられる。Q の性質説には演繹的な解釈が欠けているという問題がある。

3.2. 動詞句の数量表現

これから、数量表現の構成について、筆者の主張を展開する。本章では、「本を 3 冊読んだ」のような動詞句を中心に構成した数量表現の構成と、さらにそれに基づいて、「日立が学生の採用を 300 人中止した」の下線部のような名詞句を中心に構成した属格句と数量詞の結合体も数量表現であることを論じる。「本を 3 冊読んだ」のような数量表現と「学生の採用を 300 人」のような数量表現を区別するため、前者を**動詞句の数量表現**と、後者を**属格句の数量表現**と称する。本節で動詞句の数量表現の構成を、次の節で属格句の数量表現の構成を説明する。

動詞句の数量表現における構成要素間の関係に関して、筆者は奥津と木村と近い意見を持っている。つまり、ホスト N と遊離数量詞は同格であること（上述したように本稿では数量詞の品詞を決めることを避けたいため、奥津のように「同格名詞」とは称しない）と、動詞句の数量表現における遊離数量詞はその述語動詞を修飾すると考える。ただし、筆者は、動詞句の数量表現における Q が遊離数量詞（すなわち、NCQ タイプにおける Q）であるかどうかとは関係なく、NQC タイプと Q ノ NC タイプにおける Q でも、ホスト N と同格関係を持ち、さらに、この同格関係はホスト N と述語動詞との統語的關係に由来すると考える。つまり、動詞句の数量表現の構成には、ホスト N と Q と述語動詞と三つの要素が同時に参与していると考えられる（以下、動詞句の数量表現を構成した述語動詞のことを**ホスト V**と呼ぶ）。したがって、先行研究とは違って、本稿では**ホスト N と Q とホスト V との結合体を動詞句の数量表現とする**。これから、ホスト N と Q とホスト V との間の関係を詳しく説明する。

先行研究における問題点を再掲する。奥津（1969）は意味的な面と統語的な面により、ホスト N と遊離数量詞との同格関係を証明してはいるが、遊離数量詞がホスト N と同格関係をなす原因に関しては論じていない。また、木村（2005）は、なぜ動詞句の数量表現をなした遊離数量詞と述語動詞の間に、遊離数量詞が副詞として述語動詞を修飾できるという意味関係を持つのかについては説明していない。すなわち、両方とも帰納法で推論されてはいるが、動詞句の数量表現の構成を明らかにするには演繹法で推論する必要があるだ

ろう。

それでは、まず、ホスト N が Q との同格関係にある原因から説明する。奥津ははっきりと述べていないが、ホスト N と Q が同格的であるということは、両者それぞれのホスト V との格関係が同じだということである。では、なぜ Q とホスト V との格関係はホスト N とホスト V との格関係が同じなのかといえ、それはホスト N と Q の関係に大きく関わっているだろう。筆者は、ホスト N と Q との関係を下記のように想定する。

- (21) ホスト N と Q との組み合わせは、意味的に「ホスト N がカウント、計算され、結果ホスト N がどれくらい存在するかを表わす」という数または量の情報提供に重点を置いたものである。**その中の Q はホスト N が数・量をカウント、計算された値を表すものである。**ホスト N はその内包的意味を指す不定名詞であり¹⁷、カウント、計算される対象を明示するための抽象的な概念である。

このように、ホスト N がカウントされ、計算された値が Q で表されることにより、Q とホスト V との格関係がホスト N とホスト V との格関係に付属して生じ、結果的に「Q とホスト V の格関係=ホスト N とホスト V の格関係」というようになったと考えられる。

ところが、Q とホスト N と（述語動詞と）が数・量情報を提供するという客観的叙述を構成しなければ動詞句の数量表現にならないため、このホスト N はどのような名詞句でもよいわけではない。ホスト N と判断されるのはホスト V の主観性・意志性の低い項名詞句、即ち先行 N のみである（なお、本章のはじめにも触れたように、N がホスト V の主観性・意志性の低い項名詞句であることは、その N がホスト N であるための必要条件であるが、十分条件ではない。簡単に言えば、ホスト N と判断される N は、先に先行 N としての定義を満たさなければならないが、先行 N は必ずホスト N であるとは限らないということである）。結論的にいえば、N と Q と述語動詞の結合体において、NQC タイプと NCQ タイプと Q ノ NC タイプの三つのタイプが同時に成立するには、すなわち、N と Q と述語動詞が動詞句の数量表現をなすには下記(22)の2点が同時に要求される。

- (22)a. N が述語動詞の主観性・意志性の低い項名詞句であること（基本的に、先行

¹⁷ 奥津（1983:77）は「N ノ Q 型の定名詞句の中の Q は移動できない」と述べた。筆者は、これは数量表現の定義により、定名詞句が数量表現を構成できないためと考える。

N は述語動詞が自動詞の場合¹⁸における主語に位置する N (=ガ格名詞句) と述語動詞が他動詞の場合における目的語に位置する N (=ヲ格名詞句) である)。

- b. その N がカウント、計算され、結果 N がどれくらい存在するのかを Q で表していること (cf. (21))。

この(22)に従うと、木村 (2005) における問題点—なぜ動詞句の数量表現をなした遊離数量詞と述語動詞の間に、遊離数量詞が副詞として述語動詞を修飾できるという意味関係が存在するのか—も説明できる。それは、Q は N と (22b) のような関係を保っているため、(22a) に述べた N と述語動詞との関係が Q と述語動詞の間にも存在するようになる。その結果、Q はホスト N の数を限定すると同時に、ホスト V が行われる回数や量 (存在動詞の場合は存在の数・量) をも限定することになるからである。つまり、**ホスト N の数・量と、ホスト V が表す出来事が行われる回数・量 (存在動詞の場合は存在の数・量) と一致するのである**。例えば、「本を 3 冊読んだ」なら、「本」も「3」冊で、「本を読む」ことも「3」回行われたということである。注意すべきは、**(22a) だけを満足したものが先行 N であり、(22a) と (22b) を同時に満足したものがホスト N ということである**。

以上の動詞句の数量表現が構成するしくみをまとめてみると、下記のようになる。

- (23) a. 動詞句の数量表現であるということは、それにおける Q と N が述語動詞と数・量情報を提供するという客観的叙述を構成することである。
- b. Q と N と述語動詞が数・量情報を提供するという客観的叙述を構成するには、(22) を満足しなければならない。つまり、述語動詞の主観性・意志性の低い項名詞句を先行 N に取ること (22a) と、その N がカウントされ、計算された結果を表す Q が加えられること (22b) により、Q と N が同格関係になることである。この Q と同格関係にある先行 N がホスト N である。
- c. この Q と先行 N と、さらに動詞句の数量表現の構成に参与した述語動詞との結合体が動詞句の数量表現をなす。動詞句の数量表現の構成に参与した述語動詞であるかどうかを判断する際には、① ((22a) により) 動詞句の数量表現におけるホスト N がその述語動詞の主観性・意志性の低い項名詞句

¹⁸ 論述の便宜上、上述したような、遊離数量詞構文の場合、述語が非能格動詞を取り、さらに「ゲラゲラと」のような付加的な語が遊離数量詞の直前へ挿入されたことによる影響を考慮しない。

であるか、②ホスト N の数・量と、述語動詞が表す出来事が行われる回数・量（存在動詞の場合は存在の数・量）と一致するか、という二点を参照すればよい。

ここまでの論述を、動詞句の数量表現は Q と N が同格関係にあるかどうかによって決まり、そして、その同格関係は構文上で N と述語動詞の関係及び N と Q の関係によって決まると簡単にまとめることができるだろう。これによると、3.1 で触れた問題一なぜ(7a)「今年は東京へ3回行った」は数量表現と認められず、(18)「この会社は今まで採用面接を3回行っていたが、今年から面接の回数を1回減らすことになった」は数量表現と認められるのかも(22)で説明できよう。

それは、加藤（2003）や岩田（2013）が主張した「Qの表す対象による違い」によるのではなく、(7a)における Q=「3回」は N=「東京」と同格関係ではないために数量表現を構成していないからである。つまり、N=「東京」は述語動詞=「行った」の主観性・意志性の低い項名詞句にあたるが、Q=「3回」は N=「東京」がカウントされた結果を表すものではない、すなわち、(22a)と(22b)のいずれも満足していないため、「東京」と「行った」は、Q=「3回」と数量表現をなすホスト N とホスト V ではない。また、(13)～(17)も同じ理由により、それぞれの Q が文にある他の要素と数量表現をなしていない。それに対して、上記の(6)と(18)における Q はそれぞれの N ((6)⇒「りんご」、(18)⇒「(面接の)回数」と述語動詞と数量表現を構成している。

同様に、上述した先行研究 (cf. 3.1) に指摘された、(19a)「3冊の本を読んだ」と(19b)「本を3冊読んだ」には意味の差がないが、(20a)「10段の階段を登った」と(20b)「階段を10段登った」には意味の差があるという現象も Q がその N と述語動詞と数量表現を構成しているかどうかに着目できる。(19a)と(19b)における Q=「3冊」と N=「本」と述語動詞=「読んだ」は数量表現を構成している。それに対して、(20a)、(20b)における N=「階段」は述語動詞=「登った」の主観性・意志性の低い項名詞句にあたるが、Q=「10段」は N=「階段」がカウントされた結果を表すものではない（「階段」を数えることになると、「一続きの階段」「二続きの階段」…のようになる）。すなわち、(22a)と(22b)のいずれも満足していないため、(20a)、(20b)における「階段」と「登った」と「10段」とは数量表現をなしていない。

一方、数量表現でないものの中には、(7)、(13)～(17)、(20)の状況と違うものもある。

例えば、下記の(24)では、N=「母」と述語動詞=「行った」は(22a)を満足しているが、Q=「1人」とN=「母」は(22b)を満足していない。確かに、Q=「1人」がN=「母」の数を限定している（つまり、Qの類別詞が先行Nのカテゴリーと一致している）が、固有名詞や代名詞はそもそも唯一の存在を表す名詞であり、わざわざ「1」と数量を説明する必要はない。よって、ここのQ=「1人」は「母」がカウントされ、結果何人いるのか」という数・量の情報を提供しておらず、ただ「だけ」のような、限定を表す取り立て助詞に近いものである（日本語記述文法研究会編 2009）。しかも、「母」は定名詞句であり、(21)における「ホストNは不定名詞句である」という条件に違反する。(25)も同様な理由により、数量表現ではない。

(24) 彼女は母を 1人 残してお嫁に行った。

(25) 10人の中で、彼が 1人 合格した。

そのほか、(26)のような代名詞として使われる数量詞や、(27)のような「話し手が思い浮かべている、特定の名詞を談話に導入する」（(27)の駅前にある喫茶店は2軒以上である可能性もあるため）（日本語記述文法研究会編 2009:188）用法の数量詞を用いた表現も、それらのQが先行Nの数・量の情報を提供していないため、数量表現と見なさない。

(26) クラスの日本人は須田と山本と岩田だ。3人は仲がわるい。（岩田 2013:3）

(27) 駅前に 1軒 の喫茶店がある。学生時代の私は毎日のようにそこに通っていた。（日本語記述文法研究会編 2009:188）

簡単にいえば、(7)、(13)～(17)、(20)はそれらのQが文にある先行Nと述語動詞と数量表現を構成していないため数量表現と認められないのに対して、(24)～(27)はQ自体が数・量を表していないから数量表現でなくなる。

(7)、(13)～(17)、(20)ではQが先行Nの数を限定していないが、Qが何らかの数・量情報を提供しているという点では数量表現におけるQと同じである。ここで、(7)、(13)～(17)、(20)のような一見動詞句の数量表現と似ており、そのQも動詞句の数量表現におけるQと同じ働きをするが、数量表現でない先行NとQと述語動詞の結合体（以下、このような結合体を「**動詞句の偽数量表現**」と呼ぶ）の構成はどのようなになっているのかと

いう興味深い問題が湧いてくる。これらの問題については第4章で説明する。

3.3. 属格句の数量表現

3.2の冒頭にも述べたが、動詞句の数量表現以外に、「日立が学生の採用を300人中止した」の下線部のような**属格句の数量表現**も存在する。先行研究では、「日立が学生の採用を300人中止した」のような構文における数量詞遊離現象について議論されているが、その構文のどの部分が数量表現なのかは厳密に規定されていない。本節では、筆者は動詞句の数量表現の構成に基づき、属格句と数量詞の結合体の部分が数量表現であるという論証を試みる。

まず、先行研究を概観してみよう。Kikuchi (1994) は、動詞句だけでなく、属格からの数量詞遊離もあることを指摘した。Kikuchi (1994:81) は Miyagawa (1989) の相互 C-統御に基づいて修正し、数量詞が移動する条件について、数量詞はそれが叙述した DP (名詞句) によって C-統御されると提案した。例えば¹⁹、

- (28) a. 日立が 学生の採用を 300 人中止した。 (Kikuchi 1994:83)
b. あの医者は 児童の目を 30 人調べた。 (Kikuchi 1994:86)
c. *ジョンが 子供たちのおもちゃを 3 人壊した。 (Kikuchi 1994:82)

(28a)と(28b)はそれぞれ「学生300人の採用」と「児童30人の目」におけるQが移動したとみなされている。詳しく説明すれば、Q=「300人」は「学生300人」の属格の一部であるにもかかわらず、「学生の採用」という名詞句を越えて移動しているということである。

「児童30人の目」も同様である。Kikuchiはこの現象に対してさらに次のように説明している—(28a)の場合、主要部名詞=「採用」のような動名詞は動詞の素性を持つため、LF²⁰

(Logical Form)において「採用」が上がり、そうすると、「学生」はやはり「300人」と相互C-統御し合っている。そして、(28b)の場合、すなわち「目」が「児童」の一部分のような[ノ格名詞+ノ+主要部名詞]が不可分離所有物である場合は、「あの医者は 児童の [児童の目]を30人調べた」のように、所有者(下線部)が隠れている。その隠れた所有者「児童(の)」が「30人」と相互C-統御し合っている。ところが、(28c)のような主要部名詞が普通名詞(simple noun)の場合、「子供たち(の)」がNP「子供たちのおもちゃ(を)」

¹⁹ (28)の原文はローマ字。

²⁰ 概念・意図のインタフェイスで解釈されうる形となった言語表示。

にはめ込まれているため、「3 人」と相互 C-統御できない。

(28a) のような場合に関しては、筆者も主要部名詞が動詞的であることと関連し、(28b) と (28c) の場合はノ格名詞と主要部名詞が分離可能か不可かに関連しているとは考える。しかし、筆者は属格からの数量詞遊離が相互 C-統御とは関係しているかどうかはさておき、別の観点で考えてみたい。

筆者は (28a) と (28b) に動詞句の数量表現に相当する構造、すなわち数量表現が存在する と考える。それでは、筆者が想定した (28a) と (28b) のような構文における数量表現に当たる部分を規定しよう。(28a) と (28b) を例にすれば、(28a) と (28b) における数量表現はそれぞれ「学生の採用を 300 人」と「児童の目を 3 人」の部分に当たる。なぜ「学生の採用を 300 人」と「児童の目を 3 人」の部分が数量表現なのかといえ、それらの構造が前述した動詞句の数量表現の構造に類似しているからである。ここで、(23) の動詞句の数量表現が構成するしくみを再掲しよう。

- (23) a. 動詞句の数量表現であるということは、それにおける Q と N が述語動詞と数・量情報を提供するという客観的叙述を構成することである。
- b. Q と N と述語動詞が数・量情報を提供するという客観的叙述を構成するには、(22) を満足しなければならない。つまり、述語動詞の主観性・意志性の低い項名詞句を先行 N に取ること (22a) と、その N がカウントされ、計算された結果を表す Q が加えられること (22b) により、Q と N が同格関係になることである。この Q と同格関係にある先行 N がホスト N である。
- c. この Q と先行 N と、さらに動詞句の数量表現の構成に参加した述語動詞との結合体が動詞句の数量表現をなす。動詞句の数量表現の構成に参加した述語動詞であるかどうかを判断する際には、① ((22a) により) 動詞句の数量表現におけるホスト N がその述語動詞の主観性・意志性の低い項名詞句であるか、②ホスト N の数・量と、述語動詞が表す出来事が行われる回数・量 (存在動詞の場合は存在の数・量) と一致するか、という二点を参照すればよい。

(23) にしたがって、属格句の数量表現を考察してみよう。例えば、(28a) の「学生の採用を 300 人」を例にして説明してみれば、Q=「300 人」が、「学生」が数・量をカウント、

計算された値を表しているため、(22b)を満足する。よって、ノ格名詞=「学生」がホスト N であり、Q と同格関係をなすと仮定できる。ここまでは動詞句の数量表現の構成と同様である。

ただ違うのは残りの一つの要素である。動詞句の数量表現では動詞句、つまり、ホスト V が残りの一つの要素であるのに対して、「学生の採用を 300 人」では名詞句=「採用」がその最後の要素である。論述の便宜上、「採用」のような主要部名詞を N' と呼ぶ。さらに、「採用」は動詞句の数量表現のホスト V に相当する構成要素である。数量表現の構成に参加しない N' と区別するため、このような数量表現の構成に参加した N' をホスト N' と称しよう。このように、品詞が違うが、ホスト N' のその数量表現における働きと、ホスト V のその数量表現における働きとはやはり類似しているのである。この類似性は、ホスト N' が属格句の数量表現におけるホスト N と Q に対して持つ関係と、ホスト V が動詞句の数量表現におけるホスト N と Q に対して持つ関係を対照してみれば確かめられる。

まず、意味的に似ているのかを見てみよう。意味的類似性は次の二つの面から考察できる。第一に、動詞句の数量表現の構成条件によれば、ホスト N と Q とは同格関係にあるため、ホスト V とホスト N の関係=ホスト V と Q の関係である。例えば、前述したように、「本を 3 冊読む」は「本を読む」とも「3 冊を読む」ともいえる。そうであれば、属格句の数量表現においても、ホスト N' とホスト N の関係=ホスト N' と Q の関係なはずである。(28a) の「学生の採用を 300 人」を見れば、「学生の採用」とも「300 人の採用」ともいえるため、類似していると判断できる。第二に、上述したように、動詞句の数量表現のホスト V は(23c)の②を満足する。つまり、ホスト N の数・量と、ホスト V が表す出来事が行われる回数・量（存在動詞の場合は存在の数・量）とが一致する。この一致性は属格句の数量表現におけるホスト N とホスト N' にも存在する。例えば、(28a) では「300 人の学生」=「300 人（分）の採用」、(28b) では「30 人の児童」=「30 人（分）の目」というように、ホスト N の数とホスト N' の数が一致している。

次に、統語的に似ているのかを見てみよう。動詞句の数量表現におけるホスト V には項があるが、属格句の数量表現におけるホスト N' には項があるはずがない。しかし、ホスト N' は(22a)の「述語動詞の主観性・意志性の低い項名詞句をホスト N に取る」という条件を満足できないから、ホスト V とは統語的類似性を持たないかといえ、そうではない。両者には統語的類似性を持つのである。X バー構造でみると、動詞句の数量表現の場合、ホスト V とホスト N は姉妹関係にある。さらに、ホスト N が枝分かれの左側を占め、補

部であり、ホスト V が右側を占め、主要部である。例えば、「本を 3 冊読んだ」の場合は、その構造は下記の図 2 のようになる。

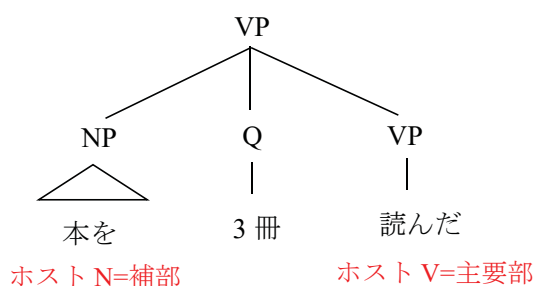


図 2

(28a) の場合、ホスト N' = 「採用」とホスト N = 「学生」も姉妹関係をなしている。しかも、ホスト N' はホスト V と同じように、枝分かれの右側の位置を占め、主要部である。ホスト N = 「学生」がその左側を占め、補部である。

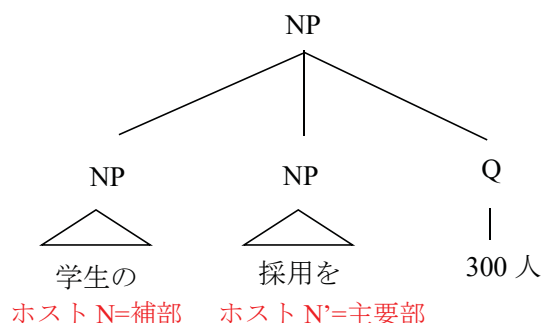


図 3

ところで、ホスト N とホスト N' の関係は「前者が後者の補部である」だけにとどまらず、Kikuchi (1994) が主張したように、ホスト N' がホスト N を目的語にした動名詞か、あるいは両者が分離不可という一体関係にある。このような一体関係は動詞句の数量表現におけるホスト N とホスト V との間にもある。「ホスト N がホスト V の主観性・意志性の低い項名詞句である」がまさにこの一体関係であろう。これが、先にも触れたが、Q がホスト N という片方の数・量を限定すれば、もう一方のホスト V (/ホスト N') の動作が行われる回数・存在の数・量などをも限定することになる原因である。この一体関係は数の一致

性に反映されているだけでなく、例えば(28b)において、ホスト N' = 「目」を調べたということは、ホスト N = 「児童」を調べたということになるというところにも反映されている。それに対して、(28c)の「*子供たちのおもちゃを3人」のようなノ格名詞と主要部名詞が分離不可な場合は、Qが「子供たち」の数を限定しても、「おもちゃ」の数を限定することもしなければ²¹、「おもちゃ」を「壊した」といっても、「子供たち」も「壊した」ということにもならない。

このように、属格句の数量表現におけるホスト N'は動詞句の数量表現のホスト Vに相当すると判断でき、補部である Nもホスト Nと捉えてよいだろう。そうすれば、属格句の数量表現における先行 Nを、ホスト N'の補部 Nであるとも定義できる。

また、「学生の採用を300人中止した」を動詞句の数量表現と捉える（つまり、ホスト N = 「学生の採用」、Q = 「300人」、ホスト V = 「中止した」と見なす）ことはできない。このことは、数量詞遊離の三つのタイプが同時に成立できるかどうかによっても検証できる。例えば、「学生の採用を300人中止した」を動詞句の数量表現と見なすと、

- (28)' a. 学生の採用 を 300人 中止した。 ⇒NCQタイプ
 b. * 学生の採用 300人 を 中止した。 ⇒NQCタイプ
 c. 300人の 学生の採用 を 中止した。 ⇒QノNCタイプ

のように、NQCタイプが非文になる。しかし、下記の(28)''のように、「学生の採用を300人」の部分の数量表現と見なせば、三つのタイプが同時に成立できる。

- (28)'' a. 学生の 採用を 300人 中止した。 ⇒NC(N')Qタイプ
 b. 学生 300人の 採用を 中止した。 ⇒NQC(N')タイプ
 c. 300人の 学生の 採用を 中止した。 ⇒QノNC(N')タイプ

以上により、属格句の数量表現の構成を確認できた。整理すれば、「ホスト N'の補部となる名詞句は先行 Nである。その先行 Nが Qと同格関係にあるため、両者が数量表現を構成する。先行 Nがホスト Nである。」とまとめることができる。動詞句の数量表現と類似

²¹ Kikuchi (1994) は属格句の数量詞遊離は Q と N の数が一対一であることを要求するとは述べたが、なぜ Q と N の数は一対一になっているのかについて説明していない。

した構成を持つため、(28a)と(28b)における数量表現に当たる部分はそれぞれ「学生の採用を300人」と「児童の目を3人」であると確認できた。しかし、(28c)の場合は、Q=「3人」と先行N=「子供たち」は同格関係にあるが、「おもちゃ」はホストN'ではない。「3人の子供たち」=「3人のおもちゃ」だが、「3人のおもちゃ」が必ずしも「3人分のおもちゃ」ではない。つまり、(23c)の②に違反している。したがって、(28c)の「*子供たちのおもちゃを3人」における先行N=「子供たち」とN'=「おもちゃ」とQ=「3人」は数量表現をなしていないため、遊離できないのである。

以上の内容を、Qと名詞修飾のNが同格関係にあると確認できれば、両者が数量表現を構成すること、数量詞が属格句の数量表現からも遊離できることの二つにまとめられる。さらに、動詞句の数量表現の構成条件(22)に倣って、下記の(29)のように属格句の数量表現の構成条件をまとめられる。

- (29) a. NがN'の補部である。さらに両者は、N'がNを目的語にした動名詞か、あるいは両者が分離不可であるという、一体関係にあること。
- b. そのNがカウント、計算され、結果Nがどれくらい存在するのかをQで表していること (cf.(21))。

これで、動詞句の数量表現であろうと、属格句の数量表現であろうと、数量表現のしくみの解釈を一つに統一できる。

属格句の数量表現に対する考察はここで終わるが、興味深い問題が一つ残っている。先ほど述べたように、(28c)の「*子供たちのおもちゃを3人」における「子供たち」と「おもちゃ」と「3人」とは数量表現をなしていない。それでは、3.2の最後に残された問題点と似たように、(28c)におけるQ=「3人」が先行N=「子供」の数・量情報を提供しているという点では数量表現におけるQと同じであるが、Qと先行Nが「おもちゃ」と数量表現を構成していない場合はどうか。つまり、(28c)のような一見属格句の数量表現と似ており、そのQも属格句の数量表現におけるQと同じ働きをするが、数量表現でない先行NとQとN'の結合体（以下、このような結合体を「**属格句の偽数量表現**」と呼ぶ）の構成はどのようなになっているのか。この問題については次の第4章で論じる。

4. 数量表現と偽数量表現の構成的な違い

本章は Q が文における他の要素と持つ関係と、Q の文における働きを解明することを目指す。論述の便宜上、本稿では、例えば(18)における「減らす」のような Q と N と数量表現を構成した（すなわち、その主観性・意志性の低い項名詞句をホスト N にとった）「ホスト V」と区別するため、(7a)における「行った」のような数量表現の構成に関与しない述語動詞のことを「**文面 V**」と呼ぶことにする（(18)と(7a)を下記に再掲する）。

(18) この会社は今まで採用面接を 3 回行っていたが、今年から面接の回数を 1 回減らすことになった。

(7a) 今年は東京へ 3 回行った。

(28a)における「採用」、(28b)における「目」のような Q と N と数量表現を構成したホスト N'と区別するため、(28c)における「おもちゃ」のような、数量表現の構成に関与しない N'のことを「**文面 N'**」と呼ぶことにする（(28)を下記に再掲する）。

(28) a. 日立が 学生の採用を 300 人中止した。 (Kikuchi 1994:83)

b. あの医者は 児童の目を 30 人調べた。 (Kikuchi 1994:86)

c. *ジョンが 子供たちのおもちゃを 3 人壊した。 (Kikuchi 1994:82)

注意すべきは、「文面 V」は「ホスト V」の対極語ではなく、「ホスト V であるかどうかにかかわらず、文に現れている述語動詞」のことを指している点である。「文面 N'」も同様である。

第 3 章に述べたように、先行研究では、数量表現と偽数量表現における数量詞遊離の可と不可などのような文法性の違いや意味の違いを、Q の表す対象や Q の性質による差異や、（動詞句の数量表現と動詞句の偽数量表現の場合）先行 N と Q が相互 C-統御し合うかによる差異、または（属格句の数量表現と属格句の偽数量表現の場合）先行 N と文面 N' が相互 C-統御し合うかによる差異によると見なしている。筆者は Q に「限定詞」と「修飾語」との違い、及び奥津の同格名詞説と木村の遊離数量詞と述語動詞との意味関係説を認めるが、それらの説には演繹的な解釈が欠けている。そこで、筆者は奥津の同格名詞説と

木村の遊離数量詞と述語動詞との意味関係説をもとにし、数量表現の構成を明らかにし、数量表現の構成条件—Q と先行 N と文面 V（か、Q と先行 N と文面 N'）とはどのような関係にあるときに、数量表現をなすか（cf. (22)、(29)）—を解明した。そして、数量詞遊離を可能にする原因は、数量表現の構成条件を満足しているためであり、数量詞遊離を不可能にする原因は、その条件を満足していないためであると主張した。なお、数量表現と類似するが、数量表現の構成条件を満足しないものを偽数量表現と呼ぶ。

ところが、数量表現の構成を把握しただけで、あくまでも数量表現と偽数量表現を区別することしかできない。それでは、数量詞遊離の可と不可という差異が存在する原因に対する、演繹的な推論にならない。本章では、数量詞遊離を可能にする原因を演繹的に論証するため、偽数量表現の構成を明らかにした上で、数量表現と偽数量表現における構成的な違いは何なのかを解明していく。

第3章により、数量表現においても、偽数量表現においても、Q の働きは同じく、「何かの数・量情報を提供する」こととわかった。つまるところ、数量表現と偽数量表現には Q にかかわる、構成上の共通点があると予測できるだろう。したがって、本章で、筆者は偽数量表現における Q と、偽数量表現における他の構成要素との関係に着目し、数量表現と偽数量表現を同時に構文レベルで考察を行う。さらに、数量表現と偽数量表現における Q の働きも検討してみる。

以下、筆者が想定した、数量表現が用いられて構成された文（以下、「**数量表現構文**」と呼ぶ）の分類を系統的に概観してみよう。数量表現構文は、その構成によって大きく二種類に分けられる。

一つは、数量表現がそのまま1文として成り立つものである。例えば、「本を3冊読んだ」や「山道を20km歩く」などのような**動詞句の数量表現構文**と、(28a)「日立が学生の採用を300人中止した」の下線部のような**属格句の数量表現構文**²²である。前者は動詞句を中心にした数量表現で成立するため、1節の単文となる。後者は名詞句を中心にした数量表現で成立するため、1句の名詞句となる。このような類を**単純数量表現構文**と呼ぶ。

もう一つは、単純数量表現構文と対立する**単純数量表現構文包含文**（以下、**包含文**と呼ぶ）である。包含文とは、単純数量表現構文が構成要素として、他の動詞文に入っている構文である。詳しく言えば、動詞句の数量表現構文は、1節となる単純数量表現構文が修

²² 名詞句は文ではないが、用語を統一するため、「学生の採用を300人」のようなものも数量表現構文と呼ぶ。

飾要素として、もう 1 節における構成素を修飾するという 2 節で構成した複文であり、属格句の数量表現構文は、1 つの（名詞）句となる単純数量表現構文が他の動詞文の項名詞句としての働きをするという動詞文である。動詞句の数量表現構文が包含される包含文の例については、例えば、(7a)「今年は東京へ 3 回行った」がこの類にあたる。(7a)における動詞句の数量表現を還元すれば、「今年は東京へ回数を 3 回繰り返して行った」になる。その下線部の部分が単純数量表現構文であり、「今年は東京へ行った」に包含されているのである。このような構文を「**動詞句の数量表現構文包含文**」と呼ぶ。属格句の数量表現構文が包含される包含文の例については、例えば、(28a)「日立が学生の採用を 300 人中止した」における下線部の部分が単純数量表現構文であり、「日立が（ ）中止した」に包含されているのである。このような構文を「**属格句の数量表現構文包含文**」と呼ぶ。

このような数量表現構文の分類を踏まえ、なぜ数量表現と偽数量表現が区別しにくいのかといえば、それは、Q は実際に数量表現を成す要素以外のものと文を構成する時もあり、それが形では数量表現と類似するため、数量表現と紛らわしいからだと考えられる。例えば、第 3 章でも少し触れたように、(18)「この会社は今まで採用面接を 3 回行っていたが、今年から面接の回数を 1 回減らすことになった」における Q=「1 回」は先行 N=「面接の回数」と文面 V=「減らす」と動詞句の数量表現（構文）を構成しているのに対し、(7a)は実は動詞句の数量表現構文包含文であり、(7a)における Q=「3 回」は先行 N=「東京」と文面 V=「行った」とは数量表現を構成しておらず、「回数」と「繰り返して」と動詞句の数量表現（構文）を構成している。また、(28a)「日立が学生の採用を 300 人中止した」における Q=「300 人」は先行 N=「学生」と文面 N'=「採用」と属格句の数量表現（構文）を構成しているのに対し、属格句の偽数量表現の(28c)「*子供たちのおもちゃを 3 人」は一見属格句の数量表現（構文）に見えるが、実はそれは動詞句の数量表現（構文）である。(28c)における「*（ジョンが）子供たちのおもちゃを 3 人（壊した）」を NQC(N')と Qノ NC(N')タイプにしてから、つまり「（ジョンが）子供たち 3 人のおもちゃを（壊した）」と「（ジョンが）3 人の子供たちのおもちゃを（壊した）」にしてから、動詞句の数量表現（構文）に還元すれば、それぞれ「（ジョンが）子供たち 3 人が持っているおもちゃを（壊した）」か、「（ジョンが）3 人の子供たちが持っているおもちゃを（壊した）」になる。すなわち、(28c)における Q=「3 人」は先行 N=「子供たち」と文面 V=「おもちゃ」とは数量表現を構成しておらず、先行 N=「子供たち」と「持っている」と動詞句の数量表現（構文）を構成している。

以下、動詞句の数量表現構文、動詞句の数量表現構文包含文、属格句の数量表現構文、属格句の数量表現構文包含文のそれぞれをどのように判断するかを説明しながら、数量表現と偽数量表現が用いられた構文は構成的にどのように違うのか、筆者の主張によれば、数量表現と偽数量表現に見られる文法性の違いや意味の違いをどのように説明できるかを解明していく。

4.1. 動詞句の数量表現構文と動詞句の数量表現構文包含文

既に述べたように、動詞句の数量表現と動詞句の偽数量表現の違いは、動詞句の数量表現構文と動詞句の数量表現構文包含文の違いである。それでは、まず、動詞句の数量表現構文を見てみよう。

動詞句の数量表現構文はホスト N 顕在の数量表現構文と、ホスト N 潜在の数量表現構文に分けられる。便宜上、前者をホスト N 顕在文、後者をホスト N 潜在文と略する。前者は例えば、「本を 3 冊読んだ」のようなホスト N=「本」が顕在的であるもので、後者は例えば「山道を 20km 歩く」のようなホスト N が「山道」ではなく、顕在的な「距離」であるものである。ホスト N 顕在文とホスト N 潜在文の数量表現構文は全体的に動詞句を構成している。以下、ホスト N 顕在文なのか、ホスト N 潜在文なのかを判断する過程を説明しながら、それぞれの構成を見ていく。

ホスト N 顕在文の場合は、ホスト N がもともと境界のあるものである（例えば、「本」「人」など）。そして、数量表現を構成するすべての要素—Q とホスト N とホスト V—が顕在的であり、この数量表現が 1 節の単純数量表現構文をなす。例えば「本を 3 冊読んだ」という文をホスト N 顕在文と判断した過程は以下ようになる。

- (30) a. Q=「3 冊」、文面 V=「読んだ」、文面 V の主観性・意志性の低い項名詞句=先行 N=「本」
- b. この文は先行 N=「本」自体が 3 つあることを表している（=数の情報を提供している）。つまり、ここの先行 N がカウントされ、その結果を Q で表している。よって、先行 N=「本」と Q=「3 冊」とは同格関係にあり、両者は数量表現を構成する要素であると判断でき、**先行 N=「本」がホスト N である**。
- c. 文面 V=「読んだ」はホスト N=「本」をその主観性・意志性の低い項名詞句として取っている。同時に、「本」の数と「読む」ことが行われる回数と一

致し、ともに3であるため、文面 V=「読んだ」がホスト V である。

- d. 以上をまとめて、この例文で、数量表現を構成した要素は先行 N=ホスト N=「本」と Q=「3 冊」と文面 V=ホスト V=「読んだ」となっており、つまり、ホスト N もホスト V も顕在的である。しかも、これは1 節となる数量表現で構成した文であるという特徴により、単純数量表現構文のホスト N 顕在文であると判断できる。

(30b)のように、Q と N が(21)を満足すれば、その Q と N が同格的であり、両者が数量表現を構成した要素だと判断できる。すなわち、その Q と N と数量表現を構成したホスト V が存在する。ただし、(後述のホスト N 潜在文と動詞句の数量表現構文包含文についての説明のように) 文面 V が必ずしもホスト V であるとは限らない。文面 V がホスト V であるかどうかは(30c)のようにさらに確認しなければならない。

ホスト N 潜在文の場合は、ホスト N が連続的なものや抽象的概念など境界のないものである(例えば、「時間」「距離」概念など)。そして、このホスト N は、ホスト V の主観性・意志性の低い項名詞句となる他の名詞句との余剰を避けるため文面上に現れていない。このホスト N の潜在は義務的であり、文面上に現れると文が意味的/統語的に非文になる。例えば、「山道を 20km 歩く」²³という文をホスト N 潜在文と判断した過程は下記に示す。

- (31) a. Q=「20 km」、文面 V=「歩く」、文面 V の主観性・意志性の低い項名詞句=先行 N=「山道」
- b. (「山道」を数える単位は「本」であるため、) Q=「20 km」は先行 N=「山道」がカウントされた結果ではなく、「距離」の量が計算された結果である。Q=「20km」の「km」は「距離」を段切り(量化)するための単位である。つまり、ホスト N は先行 N=「山道」ではなく、ホスト N は「距離」である。
- c. Q=「20 km」によってその量の計算結果が表されたホスト N=「距離」が文面 V=「歩く」の主観性・意志性の低い項名詞句である。同時に、「距離」の量と「歩く」ことが行われる量と一致し、ともに 20 (かける 1km) であるため、文面 V=「歩く」がホスト V である。

²³ 「歩く」は一般に自動詞と捉えられるが、本稿では、通過する場所をとる移動動詞がその場所名詞句をヲ格で取るため、この場合の移動動詞を他動詞に近いものと見なす。

- d. 以上をまとめて、この例文で、数量表現を構成したのは N=「距離」、Q=「20 km」と文面 V=ホスト V=「歩く」である。つまり、ホスト N は潜在的で、ホスト V は顕在的である。加えて、これは 1 節となる数量表現で構成した文であるという特徴により、単純数量表現構文のホスト N 潜在文であると判断できる。

次に、動詞句の数量表現構文包含文を見ていく。動詞句の数量表現構文包含文は動詞句の数量表現構文と構造的に大きく異なる。動詞句の数量表現構文であるホスト N 顕在文とホスト N 潜在文は文面上ではホスト N が明示されているかどうかという点だけで違い、両方ともホスト V が文面上に現れている 1 節で構成した単文で、単純数量表現構文である (Q と数量表現を構成した述語動詞、すなわち、数量表現の主要部となるホスト V が数量表現構文における述語動詞の位置を占めることにより、そのホスト V のある節が単純数量表現構文になると理解してもよい)。それに対して、動詞句の数量表現構文包含文は単純数量表現構文である動詞句の数量表現構文を包含する文であり、2 つの節が含まれる複文である。動詞句の数量表現構文包含文における数量表現のホスト N とホスト V は明示されなくてもよい。明示されない場合の動詞句の数量表現構文包含文は形の上で、動詞句の数量表現構文と紛らわしい。(だが、本稿での動詞句の数量表現構文包含文は、ホスト N ・ホスト V 潜在の動詞句の数量表現構文のみを指す。) 前文にも挙げた例(7a)を繰り返すと、例えば、「今年は東京へ 3 回行った」のような「回数を 3 回繰り返して」という動詞句の数量表現構文が包含され、還元すれば「今年は東京へ回数を 3 回繰り返して行った」になるものである。便宜のため、この「今年は東京へ行った」のような部分を**主体文**と、「回数を 3 回繰り返して」を**被包含数量表現構文**と呼ぶことにする。

被包含数量表現構文はそれが主体文での働きにより、さらに**副詞的**被包含数量表現構文と**形容詞的**被包含数量表現構文に分けられる。例えば、「今年は東京へ回数を 3 回繰り返して行った」の場合、被包含数量表現構文「回数を 3 回繰り返して」の部分は主体文における動詞句の「東京へ行った」を修飾し、副詞節を構成している付加語であるため、副詞的**被包含数量表現構文**である。一方、後にも詳しく説明するが、上述した(20a)「10 段の階段を登った」のような、還元すれば「10 段の段がある階段を登った」になるもの(つまり、「10 段の段がある」の部分が被包含数量表現構文で、「階段を登る」の部分が主体文である)は、被包含数量表現構文が主体文における(先行) N=「階段」を修飾しているため、

形容詞的被包含数量表現構文である。副詞的被包含数量表現構文を例に挙げれば、(7a)「今年は東京へ3回行った」を動詞句の数量表現構文包含文と判断した過程は下記のとおりである。

- (32) a. Q=「3回」、文面 V=「行った」、文面 V の主観性・意志性の低い項名詞句=先行 N=「東京」。
- b. (「東京」という町を数える単位は「つ」であるため、) Q=「3回」は先行 N=「東京」がカウントされた結果を表しているのではなく、「回数」がカウントされた結果である。つまり、ホスト N は先行 N=「東京」ではなく、ホスト N は「回数」である。
- c. Q=「3回」によってその量の計算結果が表されたホスト N=「回数」が文面 V=「行った」の主観性・意志性の低い項名詞句ではない。つまり、ホスト V は文面 V=「行った」ではない。文脈によって、「回数」は「繰り返して」の主観性・意志性の低い項名詞句であると判断できる。同時に、「回数」の数と「繰り返す」ことが行われる回数と一致し、ともに3である。よって、ホスト V は「繰り返して」である。
- d. 以上をまとめて、この例文で、数量表現を構成したのは潜在的な N=「回数」、Q=「3回」と潜在的な V=「繰り返して」である。この三つの要素がさらに単純数量表現構文を構成し、主体文における文面 V=「行った」を修飾している。よって、「今年は東京へ3回行った」は動詞句の数量表現構文包含文であると判断できる。

以上のように、筆者はホスト N 潜在文と動詞句の数量表現構文包含文における先行 N をホスト N とは見なさず、動詞句の数量表現構文包含文の主体文における V をホスト V とは見なさない。そして、ホスト N 顕在文とホスト N 潜在文との違いをホスト N が顕在的なのか潜在的なのかによる違いと想定し、動詞句の数量表現構文包含文はまた別の構成をしているものと想定する。

しかし、従来の研究では「先行 N」と「ホスト N」とを、また「文面 V (=動詞句の数量表現構文包含文の主体文における述語動詞)」と「ホスト V」とを区別しない。3.1 にも紹介したが、その中、ホスト N 顕在文とホスト N 潜在文と動詞句の数量表現構文包含文と

の違いを一律に Q の表す対象による違いだと想定されている先行研究もある。

例えば、継続時間や動作の回数、費用や時間の消費を表す「かかる」という動詞が用いられた場合、変化量を表す場合には、遊離数量詞構文に対応する Q ノ NC タイプが存在しないと主張した加藤（2003）がそうである。筆者の観点で加藤（2003）が挙げた例(13)～(15)、及び(17)²⁴を見てみよう。(13)～(15)、(17)を下記のように再掲する。

- (13) a. 剛は本を 2 時間読んだ。
b. *剛は 2 時間の本を読んだ。 (加藤 2003:436)
- (14) a. 彼女は南アフリカを 2 度訪れている。
b. *彼女は 2 度の南アフリカを訪れている。 (加藤 2003:436)
- (15) a. 駅まで 20 分かかる。 (加藤 2003:438)
b. 金沢まで 930 円かかる。 (加藤 2003:438)
- (17) a. 温度を 1 度あげる。
b. 平均速度が 5km/h アップした。 (筆者の作例)

筆者の観点に従えば、(13)～(15)、(17)の差異は構文類型上の差異である。すなわち、(13)と(14)は動詞句の数量表現構文包含文である。(13)では、Q=「2 時間」のホスト N=「時間」とホスト V=「かけて」とが明示されておらず、(14)では、Q=「2 度」のホスト N=「度数」とホスト V=「繰り返して」とが明示されていない。(17)はホスト N 潜在文であり、(17a) (17b)の潜在的ホスト N は両方とも「差」である。(15)の場合は、(15a)のホスト N が「時間」で、(15b)のホスト N が「金」で、両方ともホスト N が文中に現れていないが、それはホスト N 潜在文とは性質が異なる。(15)もやはりホスト N 顕在文だと考えられる。(15)のような構文においてホスト N が現れないのは、ホスト N と Q における類別詞と重複しており、類別詞との余剰を避けるために省略されており、義務的な潜在ではないためである。それに対して、ホスト N 潜在文のホスト N は文における他の名詞句との余剰を避けるために隠れるのであり、その潜在は義務的である。このことの反映として、ホスト N 潜在文のホスト N は還元できないが、(15)のような文におけるホスト N は還元できる。例えば、ホスト N 潜在文の「山道を 20km 歩く」にホスト N を入れ、「*山道を距離を 20

²⁴ (16)の例は、3.1 にも述べたように、「十秒三」が数量詞ではなく、「2018 年 3 月 14 日」と同じような名詞的なものであり、数量表現や数量表現構文と関わらないため、省略する。

km歩く」という非文になるが、(15a) (15b)にホスト N を入れると、それぞれ「駅まで時間が 20 分かかる」「金沢までお金が 930 円かかる」になり、文法的である。要するに、(13)～(15)、(17)には対応する Q ノ NC タイプが存在しないというより、そもそも(13)～(15)、(17)における先行 N ((15)における「駅まで」「金沢まで」は本稿の定義に従うと、先行 N にもならないが) は、その Q と数量表現を構成する名詞句ではないのである。

また、国宏(1980:16)が指摘した、Q ノ NC タイプが対応する遊離数量詞構文がない場合があるという現象を、Q には「属性 Q」と「数量 Q」(奥津 1983)、あるいは「限定詞」と「修飾語」(神尾 1977)、あるいは「存在数量詞」と「非存在数量詞」(加藤 2003)と二種類あると解釈したのも同様である。筆者は、第 2 章で述べた数量詞の定義に当てはまれば、すべての Q が同じ一種類しかなく、(19)と(20)の差異も構文類型上の差異であると考ええる。(19)と(20)を下記に再掲する。

(19) a. 3 冊の本を読んだ。

b. 本を 3 冊読んだ。

(20) a. 10 段の階段を登った。

b. 階段を 10 段登った。

(19)はホスト N 顕在文であり、先行 N がホスト N である。それに対して、(20a)は動詞句の数量表現構文包含文であり、先行 N=「階段」と文面 V=「登った」はホスト N とホスト V ではない。(20a)は、「10 段の段がある階段を登った」の「段がある」が文面上で隠れていると考えられる。つまり、「10 段の段がある」という部分がその被包含数量表現構文である。(20a)では、「登った」のは「階段」全体ではある。先行 N=「階段」が文面 V=「登った」の主観性・意志性の低い項名詞句、すなわち目的語ではあるが、Q=「10 段」が先行 N=「階段」がカウントされた結果を表していないため、Q=「10 段」と先行 N=「階段」は同格的ではない。ここでカウントされているのは文面上出ていないホスト N=「段」であり、Q=「10 段」がその「段」がカウントされた結果を表すものである。この二点により、Q=「10 段」と同格的なのは「段」であると判断できる。したがって、Q=「10 段」のホスト N は潜在的な「段」である。加えて、Q と同格関係にあるこの「段」をその主観性・意志性の低い項名詞句にとったのは「ある」であるため、ホスト V は文面 V=「登った」ではなく、潜在的な「ある」である。よって、Q=「10 段」は先行 N=「階段」と文面 V=

「登った」と数量表現を構成していない。Q=「10 段」と数量表現を構成しているのは、「段」と「ある」である。一方、(20b)はホスト N 潜在文であり、文面 V=「登った」はホスト V であるが、「階段」はホスト N ではない。このホスト N は文面上で隠れている「段」だと考えられる。(20b)では、「登った」のは「階段」全体ではなく、「段」である。確かに、「階段」が文面 V=「登った」の主観性・意志性の低い項名詞句、すなわち目的語ではあるが、Q=「10 段」は先行 N=「階段」がカウントされた結果を表していないため、Q=「10 段」と先行 N=「階段」も同格的ではない。ここでカウントされているのは文面上出していない「段」であり、Q=「10 段」がその「段」がカウントされた結果を表すものであるため、Q=「10 段」と同格的なのは「段」である。つまり、Q=「10 段」と数量表現をなしたホスト N は潜在的な「段」である。加えて、Q と同格関係にあるこの「段」は文面 V=「登った」の主観性・意志性の低い項名詞句であるため、ホスト V は文面 V「登った」である。そのため、Q=「10 段」と数量表現をなしたのは、「段」と「登った」である。「階段」は数量表現の構成に参加していない。このような違いがあることによって、(19)と(20a)と(20b)の間に意味の違いが生じたのである。

4.2. 属格句の数量表現構文と動詞句の数量表現構文

属格句の数量表現と属格句の偽数量表現の違いは、属格句の数量表現構文と動詞句の数量表現構文の違いである。まず、属格句の数量表現構文を見てみよう。

属格句の数量表現構文におけるホスト N とホスト N'とは、Kikuchi (1994) が主張したように、ホスト N'がホスト N を目的語にした動名詞か、あるいは両者が分離不可という関係にある。そして、この数量表現が 1 節の単純数量表現構文をなす。例えば(28a)における「学生の採用を 300 人」という文を属格句の数量表現構文と判断した過程は以下のようになる。

- (33) a. Q=「300 人」、文面 N'=「採用」、文面 N'の補部=先行 N=「学生」
- b. この文は先行 N=「学生」自体が 300 (人) いることを表している (=数の情報を提供している)。つまり、ここの先行 N がカウントされ、その結果を Q で表している。よって、先行 N=「学生」と Q=「300 人」とは同格関係にあり、両者は数量表現を構成する要素であると判断でき、**先行 N=「学生」がホスト N である。**

- c. 文面 N' = 「採用」の補部はホスト N = 「学生」であり、しかも文面 N' が先行 N を目的語にした動名詞であり、両者が一体関係にある。このことは「学生」の数と「採用」の数と一致し、ともに 300 であることから証明できるため、**文面 N' = 「採用」がホスト N' である。**
- d. 以上をまとめて、この例文で、数量表現を構成した要素は先行 N = ホスト N = 「学生」と Q = 「300 人」と文面 N' = ホスト N' = 「採用」となっている。しかも、これは 1 節となる数量表現で構成した文であるという特徴により、単純数量表現構文の属格句の数量表現構文であると判断できる。

次に、属格句の偽数量表現である動詞句の数量表現構文を見てみる。属格句の偽数量表現である動詞句の数量表現構文における先行 N と文面 N' とは、属格句の数量表現構文における先行 N と文面 N' とは異なり、分離可能な所有関係 (= 先行 N が文面 N' を所有する関係) にある。この所有関係の本質は「[先行 N] が [文面 N'] を持っている」という関係であるため、属格句の偽数量表現は実は動詞句の数量表現構文である。例えば、非文の (28c) における「* (ジョンが) 子供たちのおもちゃを 3 人 (壊した)」の文法的形—「(ジョンが) 子供たち 3 人のおもちゃを (壊した)」か、「(ジョンが) 3 人の子供たちのおもちゃを (壊した)」—を動詞句の数量表現構文と判断した過程は以下のようになる。

- (34) a. Q = 「3 人」、文面 N' = 「おもちゃ」、文面 N' の補部 = 先行 N = 「子供たち」
- b. この文は先行 N = 「子供たち」自体が 3 (人) いることを表している (= 数の情報を提供している)。つまり、ここの先行 N がカウントされ、その結果を Q で表している。よって、先行 N = 「子供たち」と Q = 「3 人」とは同格関係にあり、両者は数量表現を構成する要素であると判断でき、**先行 N = 「子供たち」がホスト N である。**
 - c. 文面 N' = 「おもちゃ」の補部はホスト N = 「子供たち」である。しかし、両者は一体関係になっていない。このことは、「子供たち」の数と「おもちゃ」の数とは必ずしも一致するとは限らないということからも証明できるため、**文面 N' = 「おもちゃ」はホスト N' ではない。**
 - d. 先行 N と文面 N' とは前者が後者を所有するという関係にある。つまり、「子供たち 3 人のおもちゃを」か「3 人の子供たちのおもちゃを」をそれぞれ「子

供たち 3 人が持っているおもちゃを」「3 人の子供たちが持っているおもちゃを」に書き換えることができる。

- e. 書き換えた「子供たち 3 人が持っているおもちゃを」「3 人の子供たちが持っているおもちゃを」の下線部を 4.1 に述べた動詞句の数量表現構文判断の仕方に従うと、動詞句の数量表現構文のホスト N 顕在文だと判断できる²⁵。

このように、属格句の偽数量表現における助詞「の」は、「持つ」のような所有を表す動詞の代わりと見なせる。それがたまたま属格句の数量表現（構文）における助詞「の」と同じ形になったため、属格句の偽数量表現を属格句の数量表現（構文）に間違えやすくなってしまうのである。

さらに、属格句の数量表現構文にも属格句の偽数量表現である動詞句の数量表現構文にも、それぞれの主体文がある。例えば、本章の最初にも述べたように、(28a)「日立が 学生の採用を 300 人 中止した」も(28b)「あの医者は 児童の目を 30 人 調べた」も属格句の数量表現構文包含文である。それぞれの下線部の部分は被包含数量表現構文である属格句の数量表現構文であり、主体文の項名詞句の働きを果たしているため、**名詞的被包含数量表現構文**と称する。それに対して、(28c)の文法的形「ジョンが 子供たち 3 人のおもちゃを 壊した」か、「ジョンが 3 人の子供たちのおもちゃを 壊した」の下線部の部分は動詞句の数量表現構文である**形容詞的被包含数量表現構文**に属する。主体文における構成素の修飾語として働きを果たしている。

4.3. Q の働き

Q の文における働きに関しては、動詞句の数量表現と属格句の数量表現の場合、それらの Q は文にある他の顕在的な要素と数量表現構文を構成するために存在するものである。つまり、それらの Q はホスト N と同格関係にあるため、**同格的数量詞**と呼ぶ。また、動詞句の数量表現構文も属格句の数量表現構文も数量表現のまま構成した単純数量表現構文であるため、それらの Q も同格的数量詞である。

一方、動詞句の数量表現構文包含文には 2 つの節が含まれるため、動詞句の数量表現構

²⁵ 「子供たち」と「3 人」と「持っている」が動詞句の数量表現構文を構成しているのならば、それを NCQ タイプ「子供たちが 3 人持っている」にも変換できるはずである。「子供たちが 3 人持っている」という文は不自然に感じる日本語母語話者がいるが、中にそれは△だと考える日本語母語話者もいる。よって、筆者は「子供たち」と「3 人」と「持っている」が動詞句の数量表現構文を構成しているという主張の妥当性を認める。

文包含文における Q の働きを二つのレベルから考察できる。動詞句の数量表現構文包含文における Q は、その被包含数量表現構文のレベルでは同格的数量詞としての働きを果たすが、主体文の中での働きは、その Q と主体文にある要素がどのような統語的關係にあるかによるのである。先にも述べたが、被包含数量表現構文は、その主体文での働きにより、副詞的被包含数量表現構文と形容詞的被包含数量表現構文に分けられる。被包含数量表現構文の部分が主体文における動詞句を修飾し、副詞節を構成するなら前者になり、包含された数量表現構文の部分が主体文における名詞句を修飾するなら後者になる。Q は被包含数量表現構文の一部であるため、Q の主体文での働きは、その Q の存在する被包含数量表現構文の主体文での働きと同じと見なす。すなわち、副詞的被包含数量表現構文の Q を**副詞的数量詞**の用法と、形容詞的被包含数量表現構文の Q を**形容詞的数量詞**の用法とする。

基本的に、Q の働きと数量詞遊離のタイプとは対応している。NCQ タイプの動詞句の数量表現構文包含文における Q は副詞的数量詞で、Q ノ NC タイプの動詞句の数量表現構文包含文における Q は形容詞的数量詞である。なお、NQC タイプの動詞句の数量表現構文包含文は存在しない。NCQ タイプの動詞句の数量表現構文における Q は一見統語上ホスト V を修飾しているように見えるが、上にも述べたように、Q とホスト V との格関係がホスト N とホスト V との格関係に付属して生じ、Q とホスト V 間の修飾・被修飾関係は結果的なものであるに過ぎない。実際は Q がホスト N のみを修飾している。しかし、副詞的被包含数量表現構文は副詞として主体文における動詞を修飾するため、主体文における(先行) N とは関係なく、副詞的被包含数量表現構文における Q は主体文の述語動詞そのものを修飾している。

属格句の数量表現構文包含文における Q の働きも二つのレベルから考察できる。動詞句の数量表現構文包含文の場合と同じように、属格句の数量表現構文包含文における Q はその被包含数量表現構文では同格的数量詞としての働きを果たすが、主体文の中での働きはその Q と主体文にある要素とがどのような統語的關係にあるかによるのである。Q は被包含数量表現構文の一部であるため、Q の主体文での働きは、その Q の存在する被包含数量表現構文が主体文で果たす働きと同じと見なす。すなわち、属格句の数量表現構文包含文における被包含数量表現構文が名詞的被包含数量表現構文であるため、その Q を**名詞的数量詞**の用法とする。

5. 結論

本稿では、まず、数量詞の定義を明確に定義をし、「数えられるもの」や「量化できるもの」の数または量を限定するものとした。

次に、数量表現の構成のしくみをみてきた。筆者は数量表現を構成するかしないかを、Q と他の要素との関係によるとする。数量表現はその構成により、動詞句の数量表現と属格句の数量表現の二種類に分けられる。

前者に関しては、述語動詞を数量表現の構成に参加しない要素と見なす先行研究とは違って、筆者は動詞句の数量表現をホスト N と Q とホスト V との結合体と想定している。そのホスト N と Q は同格関係をなし、つまり、Q とホスト V の格関係=ホスト N とホスト V の格関係である。さらに、動詞句の数量表現の構成条件を「N が述語動詞の主観性・意志性の低い項名詞句であること」と「その N がカウント、計算され、結果 N がどれくらい存在するのかを Q で表していること」の二点に絞った。

後者に関しては、筆者は属格句の数量表現と動詞句の数量表現との構成上の類似性を論証し、属格句の数量表現にあたる部分をホスト N と Q とホスト N' との結合体と想定した。そのホスト N と Q は同格関係をなし、つまり、Q とホスト N' の格関係=ホスト N とホスト N' の格関係である。さらに、属格句の数量表現の構成条件を「N が N' の補部である。さらに両者は、「N' が N を目的語にした動名詞か、あるいは両者が分離不可であるという、一体関係にあること」と「その N がカウント、計算され、結果 N がどれくらい存在するのかを Q で表していること」と二点に絞った。結果的に、Q がホスト N の数・量を限定すれば、ホスト V (/ホスト N') の動作が行われる回数・存在の数・量などをも限定することになる。このように、動詞句の数量表現と属格句の数量表現のしくみが先行研究では別々に扱われてきたが、本論文では一つの解釈で説明することを試みた。

さらに、数量表現が用いられた構文については、数量表現のままの構文は単純数量表現構文、数量表現が他の文の構成素として働きを果たすという構文は包含文と、大きく二種類に分けられる。

前者の単純数量表現構文には、動詞句の数量表現構文と属格句の数量表現構文がある。動詞句の数量表現構文はさらに「本を 3 冊読んだ」のようなホスト N=「本」が顕在的であるホスト N 顕在文と、「山道を 20km 歩く」のようなホスト N が「山道」ではなく、顕在的な「距離」であるホスト N 潜在文とに分けられる。属格句の数量表現構文は例えば「あ

の医者は児童の目を30人調べた」の下線部のような名詞句である。

後者の包含文は、動詞句の数量表現構文包含文と、属格句の数量表現構文包含文に分けられる。動詞句の数量表現構文包含文とは動詞句の数量表現構文が包含されている2節からなる構文である。例えば、「今年は東京へ3回行った」がそれにあたる。その文中に「回数を3回繰り返して」という動詞句の数量表現構文が包含され、副詞節として主体文における動詞句「東京へ行った」を修飾している。この包含された動詞句の数量表現構文は副詞的被包含数量表現構文と呼ぶ。また、動詞句の数量表現構文包含文には「10段の階段を登る」のようなものもある。その文中に「10段の段がある」という動詞句の数量表現構文が包含され、名詞修飾節として主体文における（先行）N=「階段」という名詞句を修飾している。この包含された動詞句の数量表現構文は形容詞的被包含数量表現構文と呼ぶ。ホストN潜在文におけるホストN、動詞句の数量表現構文包含文における被包含数量表現構文のホストNとホストVが潜在的であるため、ホストN潜在文と動詞句の数量表現構文包含文がホスト顕在文と紛らわしい。

属格句の数量表現構文包含文とは属格句の数量表現構文が包含されている動詞文である。例えば、「あの医者は児童の目を30人調べた」は「あの医者は（ ）調べた」という主体文が属格句の数量表現構文（=下線部）を包含する動詞文である。この包含された属格句の数量表現構文は主体文の項名詞句を構成しているため、名詞的被包含数量表現構文と呼ぶ。ここのホストNとホストN'は一体関係にある。ところが、NとQとN'の結合体における助詞「の」は分離可能な所有関係を表す場合もある。助詞「の」が所有関係を表すときに、そのNとQとN'の結合体は属格句の数量表現構文と似ているが、本質は動詞句の数量表現構文に相当するものである。

以上により、数量表現におけるQは必ずしも文における先行Nと文面V（/文面N'）と文を構成するとは限らないといえる。つまり、先行Nと、文面V（/文面N'）は数量表現を構成する要素ではない場合もあるため、先行NとホストNを区別し、または、文面VとホストV（/文面N'とホストN'）を区別するべきだと本稿は主張した。要するに、QとNと述語動詞の結合体か、NとQとN'の結合体における数量詞遊離の可と不可などのような文法性の違いや意味の違いは、Qの表す対象やQの性質による差異や、（動詞句の数量表現と動詞句の偽数量表現の場合）ホストNとQ、または（属格句の数量表現と属格句の偽数量表現の場合）先行Nと文面N'が相互C-統御し合うかによる差異ではなく、QとNと述語動詞、またはQとNとN'がどのような関係にあるか、この三つの要素が数量表

現をなしているかどうかによって決まるのである。

最後に、Q の働きについても検討した。Q の文中での働きは二つの視点から考察できる。①数量表現のレベルでは、Q は、ホスト N とホスト V (/ホスト N とホスト N') と数量表現を構成するための要素であるため、Q は同格的数量詞である。②数量表現構文のレベルでは、単純数量表現構文は数量表現のままで構成した文であるため、その Q は①と同じ、同格的数量詞である。それに対して、包含文における Q は被包含数量表現構文の一部であるため、被包含数量表現構文における Q の働きを、その Q の存在する被包含数量表現構文が主体文での働きと同じと見なす。すなわち、動詞句の数量表現構文包含文の場合、その被包含数量表現構文が副詞的被包含数量表現構文であるなら、その Q が副詞的数量詞であり、形容詞的被包含数量表現構文であるなら、その Q は形容詞的数量詞である。属格句の数量表現構文包含文の場合、Q は名詞的被包含数量表現構文の一部であるため、名詞的数量詞である。

本稿は数量表現を構成要素まで分解し、数量表現と偽数量表現の構成に対して考察・分析を行った。この考察・分析により、数量詞にかかわる表現を研究する際、数量詞自体の性質だけでなく、数量詞と構文における他の要素との関係性にも着目すべきであることが示唆される。数量詞、数量表現が用いられた表現に関する課題はまだ多く残されている。そのような課題を解決するにあたって、本稿の数量表現のしくみに対する考察は有用であろう。

6. 参考文献

- 赤楚治之 (2005) 「日本語における概数数量詞の Q-float について」『日本語文法』5-2:57-73.
- 岩田一成 (2013) 『日本語数量詞の諸相－数量詞は数を表すコトバかー』くろしお出版
- 奥津敬一郎 (1969) 「数量的表現の文法」『日本語教育』14 (『拾遺 日本文法論』ひつじ書房、1996 年)
- (1983) 「数量詞移動再論」『人文学報』160 (『拾遺 日本文法論』ひつじ書房、1996 年)
- (2007) 『連体即連用？－日本語の基本構造と諸相』ひつじ書房
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタクス」『言語』6-8
- 木村宣美 (2005) 「遊離数量詞と述語」『人文社会論叢』13、pp. 41-53.

- 国広哲弥（1980）「総説」『日英英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店
- 日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法2』くろしお出版
- Harada, S. (1976) Quantifier Float as a Relational Rule, *Tokyo Metropolitan Linguistics*, No.1
- Kikuchi, A. (1994) Extraction from NP in Japanese. *Current Topic in English and Japanese*,
ed. M. Nakamura, 79-104 Tokyo: Hituzi Syobo.
- Miyagawa, S. (1989) Structure and case marking in Japanese. *Syntax and semantics* 22: Academic
Press.